

ウィルダネスとホームレスネス  
——荒野・大海原、そして、家のないこと——  
Wilderness and Homelessness

河野 哲也

Tetsuya Kono

「建てること、住むこと」が何であるかを知るには、「建てられないこと」「住めないこと」と対照しなければならない。

個人的経験から始めよう。筆者が、三十年前に短期間滞在したピッツバーグの郊外からバスで移動したときに見た風景は、それまで見たこともないものであった。乾ききった土と小石、あとは低い灌木、それらを噴き上げる風だけという沙漠が延々と地平線まで続く。人の住まない荒野、野性動物と直面する森林、大海原。これらがウィルダネスだ。

豊島区立池袋西口公園。池袋の西口バスターミナルに隣接し、東京芸術劇場の前庭となる公園で、筆者の現在の職場である大学に近い。この場所は、さまざまなイベントが行われているとはいえ、全体にどこか陰った雰囲気があり、日比谷公園のように人びとが集う憩いの場とはなっていない。南側に大きな樹木があり、雨や日光を避けられる。そこに、家を失っている人びとが自家製のテントを張っている。公共の場所に、「私であること」を奪われた人びとが暮らしている。

一見すると対極にあるかのような北米の荒野と東京の公園であるが、それらは、移動のための場所、住むに適さない場所として共通している。しかし、両者の住めないことのもたらす質は大きく異なっている。住めないこととは何か。この問いを、メルロ＝ポンティの身体論を手掛かりにして、とくに、そこに暗黙に含まれている境界という概念を鍵にして考察してみたい。

身体の原型を卵だと仮定してみよう。あるいは、細胞でもよい。卵が卵たりえているのは、すべてが交通可能な宇宙の一部の場所に、その交通の内容と仕方に制限を加え、内部と外部を分ける境界線を引くことによってである。この境界の内部が自己と呼ばれる。境界の問題は、メルロ＝ポンティの身体論にとって中心課題である。

私たちは皮膚という境界をもっている。皮膚の下には肉と脂肪、骨があり、さらに下には臓器が存在する。皮膚はこれらの中身を守る役割をもっている。しかし、肉や脂肪、骨、内臓は何のためにあるのだろうか。生存のため、すなわち、自己を維持するため。では、その守るべき自己とは、身体のなかの何で

あるか。つまり、私の身体の本質とは何か。それは、肉や脂肪、骨、内臓のような中身ではなく、まさしく皮膚そのものである。私たちの本質は、皮膚がつくる境界にある。皮膚は、自己の内側の中身を守ることによって、再帰的に自己を維持する。私たちの自己とはこの境界のことである。私たちの身体は、カフカの『掟の門』のように、門以外に背後に何もなければいけない門である。

だが、私たちの皮膚はもろい。熱や光などのエネルギー、有害な化学物質などに抵抗する力は十分ではない。人間はまったく裸のままですごすことなどできはしない。裸体で暮らせないという私たちの根本的な傷つきやすさ、つまり脆弱性は、私たちが最初から、自分を補う存在を世界に見出せねばならないことを意味している。それは、私たちのいわゆる「本能」が貧弱であり、生まれた後にたくさんの学習を必要としていることと、ちょうどペアを為している。

人間における身体の脆弱性と「本能」の貧弱は、ジャン・ジャック・ルソーが言う完成可能性、すなわち、自然において自分に欠けているものを代補し、自然以上に高められることの現れでもある。代補の働きは、メルロ＝ポンティが取り上げた、視覚障害者のための白杖や、自動車の運転の例によく示されている。私たちの身体は白杖や自動車まで膨れ上がり、その膨張によって肉体が備えられなかった能力を手に入れる。

こうして、私たちの境界＝自己は、内部の血肉によってだけではなく、世界の事物によっても支えられる。そうした身体の不完全さを埋めるのは、しばしば人工物である。衣服と血液、道具と骨・筋肉、クリームと免疫システムは、境界の維持にとって等価に働く。外部の事物を利用することによって私たちは境界を維持する。そして、裸の自分の能力を超える。自己維持がエンハンスメントと地続きにつながってしまい、その区別が曖昧になるのは、世界に存在する代補物の能力が巨大だからであり（とくにテクノロジーの産物）、そこに接続することが自己の思わぬ拡大に至るからである。

ここでの問題は、自己の境界が拡大するという現象が何を意味するかである。それは、自己が外部の様々なものと接続し、不分明になってしまったのか。それとも、それらの外部のものを、生身の自己＝皮膚の境界を守るための手段としたのか。私の境界が問われているのである。

(つづく)